

〈原著論文〉

# 人間福祉学における「プロセス哲学」の意味と可能性 Part I

## ——福祉学上の方途的意味と展開可能性の軸心を探る——

牛 津 信 忠

### 抄 録

---

本稿は目次に記す III 部構成による全文のパート I である。われわれは、人格主体論を基軸として福祉論を考察してきた。その見地からすると、「統合作用」という「人格の作用」がまず存在する。さらに、そこにいう人格のもとに自我上の態様とそれを取り巻く環境を見出すことができる。この人間に関する本質的視点から、人間福祉の技術論へ至る推移を論じていく。そのためには福祉状況が変化してゆくプロセスについて、その条件設定を含みながら本質論から具体的対応に至る考察が綿密になされねばならない。しかし、こうした事柄について、これまでの著作において、詳細については明らかにすることができなかった。そこで、われわれはこの小稿において、科学の最先端部分といえる量子論に早くから視点を向け本質的な有機的存在性の解明に挑んだホワイトヘッドの思想を参照して論を進める。彼の「有機体の哲学」および「プロセス哲学」と呼ばれる哲学においては、本質論から宗教や科学に至る思索上の連続性のもとに「一（いち）」としての人間存在の意味的な存立がたどられる。その考察は、微視的視点に発しながら有機体の極大にまで至る巨視的かつ動態的な内容をも持つ。またそうした議論の展開は、全体を視界に収める総合的な内容を保持する。それ故、人間福祉という総合的観点から人格的開花を支える学的努力に広く貢献することが期待できるであろう。

---

キーワード：有機体の哲学，プロセス哲学，持続性，量子，両極性，現実的實在

- Part I 第一章 福祉学における原理上の考察  
第二章 ホワイトヘッドのプロセス哲学  
第三章 「現実的實在」と人格存在  
第四章 メルロポンティの現象学とプロセス哲学  
第五章 二元化を超えて延長論のなかで矛盾的同一性を探る  
第六章 有機的連続性と人格上の考察—支援と寄り添いの方途的意味

- Part II 第七章 西田哲学とプロセス哲学—類似性のなかに福祉学上の方途的存立可能性を探る  
第八章 プロセス哲学の方途的可能性と福祉学上の展開可能性
- Part III 第九章 現象学的位相論はプロセス哲学に適合するか  
第十章 人間福祉学的人格論的考察の軸心となるプロセス哲学
- 結章 福祉学上のプロセス哲学的展開可能性に即して

## 第一章 福祉学における原理上の考察

本稿では、上位概念としての最広義の社会福祉概念を、人間福祉と捉えて考察を進める。われわれは広義から最広義に至る福祉論をこれまでの著作等において人格論的な観点に立ち明らかにしてきたのであるが、それを集約して「社会福祉における相互的人格主義」Ⅰ、Ⅱとして公刊した<sup>(1)</sup>。さらにこの人格的な相互性の論理的帰結を「共感共同」の成立する「場」として纏め総括的に論じた「社会福祉における場の究明」<sup>(2)</sup>をも公にしている。前著における議論では、マックス・シェーラー（Sheler, Max）に依拠しつつ、統合作用としての人格を「個別的人格」、「社会的人格」、「秘奥人格」と区分的理解をし、この人格の下に自我上の人格を位置づけた。後者の自我においてある人格が、いわば心理学、精神医学等によって把握可能な、まさに対象化することができる人格領域であり、前者の人格は対象化されないそれそのものが統合作用としてのみあり、それ故に主体として存立しうる人格性であるとされる。この人格存立をシェーラーに従い三つの段階性を持ちつつ、さらに複合的に重なり合う人格各層として区分し、われわれはこれを人格主体とし、真の人格であるとする<sup>(3)</sup>。その人格同士が、相互性を持って存立する場を「共感共同の場」として、そこに福祉状況形成への援助技術上の糸口となる領域を見出そうとしたのが後著「社会福祉における場の究明」であった<sup>(4)</sup>。

以上のような人格理解のもとに、われわれは、人間福祉を、人格主体の確立へ向かうプロセスのなかに位置づけ、まさにそうした人格および人格高揚の場とその場における人間福祉を求める道の構築として学的体系化を図ろうとしてきた。これは、かつて嶋田啓一郎が、社会福祉の究極目的を「全人的人間の統合的人格の確立」への道として表現した福祉理念論とほぼ軌を一にする福祉観に基づく<sup>(5)</sup>。

われわれの福祉論は、この人格論としての福祉観に立ち、統合作用としての人格が十全に作用することを妨げている諸条件を克服しようとする。すなわち自我上の態様及びそれを取り巻く環境（制度的環境を中核とする）から人格への道を見出す方途、換言すると、自我と人格との作用連関を形作らんとする制度・政策及び各種実践・支援対応の現実のなかに福祉問題の解決や今後の展望を創造していく道程を発見していくことができるとする。そこにあるプロセスが、すなわちそこに見出しうる「人格」への道が、福祉用語にいう「リカバー（recover）」とされうる本質回帰ないし帰還

という人間本質の再生への歩みそのものである。それは存在価値の平等という人権論上の制度概念にも通じ、またそれ故に全ての人間における個の存立を無視することのない、社会的存在の条件設定に連続していく技術的、政策的等の支援対応たる「生活構造の確立・質の高度化」という福祉への道から発して歩む方向となっていく。そのなかに作動するのが「エンパワー（empower）」でありまた連続的帰結たる「ストレングス（strength）」であり、社会的色彩を持ってみれば「エクスクルージョン（exclusion）」からの離脱であり「インクルージョン（inclusion）」の展開・深化である。こうした人格論の本質から上記の技術論的議論への推移をより確かなものとするためには、推移してゆくプロセスが、その有機連関のなかにおける条件設定を含みながら一層明瞭にされねばならないが、こうした事柄については、われわれのこれまでの著作において十分に明らかにすることができなかった。こうした議論の十全なる展開のためには、科学的思考の議論を用いながら、上述の自我的人間存在から人格の人間存在に至る議論を微視的かつ巨視的にも見つけ解明の手順をたどっていくことが必須とされる。そのためにも、科学哲学的にも深く思索し、さらにそれがその合理性を宗教的領域にまで及ぼすことができるような思索が必要とされる。そこでわれわれは、科学の最先端部分に早くから目を向け、量子論等を綿密に用いながら、まさに真っ向からこの難題に挑んでいったホワイトヘッド（Whitehead, Alfred North）の科学哲学と称する思想を特に取り上げて、それを軸心にしながられわれの論を強化していくことが深く問いを進行させていくために論理的な妥当性を持つと考える。彼の「有機体の哲学」<sup>6)</sup>および「プロセス哲学」と呼ばれる哲学が、科学から宗教に至る思索上の連続性のもとに一（いち）としての人間存在の意味的な連続性をたどるといふ微視的視点に発しながら同時的に有機体の極大にまで至る巨視的かつ動態的な視座を持ち、またそうした議論の展開は、全体（宇宙論にまで至る）を視座に収める総合的な内容を保持し、特に人間福祉という限りのない活動や施策の連続を必須とする実践やそれを支える学的努力に大きく貢献できると考えるからである。

以下このホワイトヘッドの哲学を参照しつつ、われわれはこれまで積み重ねてきた思索との接合部分の解明の道を追い求めながら福祉学上の方途の意味とその展開可能性を開示する考察を深めていく。

## 第二章 ホワイトヘッドのプロセス哲学

われわれは前章で述べた人格論を基軸とする人間福祉上の考察に立脚し、福祉学の本質領域の究明作業を進めていく。そのステップを前進させてゆくとときに、ホワイトヘッドが見出した、科学性に裏打ちされたいわゆる「プロセス哲学」に有効な手掛かりを見出すことができる。それは自我論上の人間把握とそれとは次元を異にするかに見える人格主体としての人間存在を有機的連続性のもとに捉えることに大きく貢献する議論を提供してくれる。この論により、二元論であるとして、退

けられることが多かったシェーラーの人格論に現実態からの連続性を保持する本質論上の意味形成が可能とされる。また同時的に二元性を克服し連続性のもとに捉えようとするときに生じる、人間の客体化という主体性の喪失をどのように解決してその主体的人格の「一（いち）」たる存立性を保持するかという問題がわれわれに課されることにもなる。この可能性と課題に同時的に応えることがわれわれに求められる。

この課題への応答となるホワイトヘッドの思想展開は、総体として「有機体」の動態「プロセス」に関する思索とすることができる。これについて、エリザベス・クラウス、(Kraus, Elizabeth M.)は、著書「経験の形而上学」(The Metaphysics of Experience)<sup>(7)</sup>において次のように述べている。彼の思索は「古代ギリシャ以来の形而上学的中心課題の解明」に他ならない。しかし、段階を踏んで述べてゆくように、ホワイトヘッドにはギリシャ哲学の持つ理性信仰の側面がみられるかに思えるのであるが、また科学に依拠する(分析的)姿勢のなかにもその理性を貫いた思考の堅持がみられるかに思えるのであるが、同時に総合性を持った全体に関する思考があり、これによって彼は宗教上の考察を併存させ、彼の言葉を用いると「科学的唯物論」というある実体への確信を固持する理性信仰を超える道を提示することに成功しているのである。クラウスは、ホワイトヘッドによる古代ギリシャ以来の哲学上の特性保持について指摘すると同時に、次のような理解を提示している。「ホワイトヘッドのプロセス哲学は、在ることに対して成ることについての解明的前進を与えてくれる」、また「永遠性に対する変化することへの意味を開示してくれる」という<sup>(8)</sup>。

このような理解を前提にして、クラウスは、ホワイトヘッドのいう「プロセス」は次の3点から構成されるとする。まず①プロセスは、過去の多くの実態を内包する初期データとしての意味を持つ。その実質的存在は何らかの出来事の結果集計からの移行のなかに把握することができる。それはまた②充足へ向かうのであるが、その充足とは、十分に決定的な実態の移動であり、これをクラウスは「空間・時間の一滴」と表現する。このプロセスは「等角的対応局面」から「付加的局面」への移行として理解されており、ホワイトヘッド自身によると、それは“初期データにおける妨害となる諸要素の削除(否定的把握)を通じて統合化された予見データをさらに統合する多様な状態、寛容を単に反復する身体的あるいは物理的感性が支配する局面”からそこに何かが付加された概念上の感性が支配する特性ある局面への移行として理解されている。③この後者の局面は、さらにそれを個的に評価する感情の主観的形態を伴う純粹所与に抗する審美的付加性と、それに対する知的付加性、すなわちより複雑に対応する感情についての对象的・命題的・物理的的局面；認知的かつ想起的感性(意識的認知、主観的及び派生的判断)に区分して理解される。このような方向への移行が考えられている<sup>(9)</sup>。こうした思索の延長線上に、われわれは上記したような理性信仰的な在り方を越える道筋を発見できると考えるのであるが、その段階への思考に到る前にいくつかの過渡的考察をしておきたい。

上述のような感性的側面からの移行とともに、そのさらに詳細にわたる考察をホワイトヘッドは

本質領域に関らしめて行っている。それを以下、山本に依拠しつつ説明しておく<sup>(10)</sup>。

山本誠作は、ホワイトヘッドが「生命の動的展開をプロセスという形で捉えようとした」とする。そして彼のプロセス思想は「非感覚的知覚」であるとか「感覚—知覚」という用語を駆使しつつ、物理学領域から感覚領域にかけてその実相を明らかにしようとしたものであるという。この思想の内実においては「量子論」が重要な論点明示の根拠となる。いわく「量子や光量子は、粒子性と流動性の性格」を持つ。この「量子はエネルギーを住まわせる個体的事実である」。その個体的事実は「一契機から他の契機への連続的移行において、エネルギーの流れを形成していく」。すなわち「量子は連続的かつ不連続であり」、「時間的であるとともに空間的」「統一体である」。量子論からみるとこのような性格を持つ統一体についての理解が可能になる。こうした原理的考察のなかに人間の経験を当てはめて考えると、人間の経験的現在とは「過去を含み未来を予見」する内容を保持する。したがってそこには過去、現在、未来の「持続がある」と理解できる。「このような持続を通して、人間経験は、その都度、量子的個性を実現していく」。このように集約表現できる物理学領域における「時空的統一体としての量子に対応する状況」をホワイトヘッドは「現実的実在 (Actual Entity)」<sup>(11)</sup> ないし「現実的契機 (Actual Occasion)」概念として位置づけている<sup>(12)</sup>。

この人間経験の時空統一体＝「量子」への対応において、換言すればその対応の在り方において上述のクラウドの感覚に関する思索が重要な示唆を与えてくれる。それをさらに解題的に述べると、「身体的あるいは物理的感性が支配する局面”からそこに何かが付加された概念上の感性が支配する特性たる局面への移行プロセス」についての理解ということになる。

そのプロセスたる側面を掘り下げていくと、上記した見解が有意味となる。すなわちこの局面についてクラウドは、「個的に評価する感情の主観的形態を伴う純粹所与に抗する審美的付加性と、それに対する知的付加性すなわちより複雑に対応する感情についての对象的、命題的物理的局面；認知的かつ想起的感性」に区分して意識動態を理解している<sup>(13)</sup>。このような付加的方向への移行において、すなわち、そこに生じる審美的付加性および知的付加性が物理的局面や感性そのものなかでどのように作用形成していくかが問われねばならない。そうした作用形成の中核にあり、それ故にそれを包摂するのが「現実的実在ないし実質」という作用態に他ならず、かくして、それは量子の働きでありながらも意味形成にあたる人間経験の一（いち）としての存立態になるのである。

次章で、このホワイトヘッドのいう現実的実在についてさらに問うことにしよう。ここに一（いち）としての存在が全体的総合体と結びつくカギが内包されているが、この章に取り上げた「現実的実在」とわれわれの人格論を対比させながら検討していくことにする。

### 第三章 「現実的実在」と人格存在

「現実的実在」の本質実態についての論をわれわれの「人格論」と対照させながら考察を深めて



いくことにしよう。

ここにいう現実的実在 (Actual Entity) は「現実的実質」, 「現実的契機」とも訳される。まず、その用語に保持される内容について解明, 理解しておきたい。

ホワイトヘッドは、彼の「有機体の哲学を構成する主要な観念」として、「現実的実在」「抱握」「結合体」「存在論的原理」を挙げている。このうち「現実的実在」は「世界がそれから構成される究極的な実在的なもの (real thing)」であるとされ、その全ては、個々にわたり各様の相違があるものの「現実体が例示する原理において、全ては同一レベルにある」。「究極的事実は、一様に皆現実的実在である」。またその全ては「複合的かつ相互依存的な経験」の一つ一つである、と位置づけている<sup>(14)</sup>。こうした相互的な複合体でもあるひとつの作用存立態としての経験を前提に意識が存立するとホワイトヘッドは理解しているのである。

いわく「意識は、ある感じの主體的形式における特殊な要素である。……現実的実在は、その経験のある部分を意識したり、しなかったりし、……その完結した形相的構造としての現実的実在の経験が形作られる」<sup>(15)</sup>とする。

そのような現実的実在が、「他の諸事物のそれ自身による具体化を引き起こす」のであるが、ホワイトヘッドはこのような現実的実在が契機となり他の事物が自ら具体化していくという活動を「抱握」と表現する。これは、ある現実的実在が、他の現実的実在の与件としての意味を持って客体化されることでもある。それはまた、そこにある与件を「主體的形式としてのさまざまな在り様を伴う表現によって、それを主體的満足に吸収する表現形態として感得」され、またそうした内容となるとみることができる。これを彼は次のような一般化した表現としても提示している。「他の事物は当の現実的実質 (実在) の要素としての制限された役割において、この実質 (実在) に対する『客体』と呼ばれる」<sup>(16)</sup>。

それでは、ここでわれわれが第一章に示した「人格主体」はどのようにホワイトヘッドの文脈においては捉えられるのであろうか。このことについて考察してゆくことにする。いくつかの困難な考察を乗り越えていくときに、そこに緊密なる関係性を見て取ることができる。

前述した人格主体論には、シェラー、M. が示した世界観が内在している。それは科学によって把握可能な自我上的人格と、それと区分され、対象化して把握することのできない人格主体の矛盾的統合性のもとに成立する人格が世界内に包摂されているという世界理解の構成を持っている。これは二元論としてしか把握できないという批判を免れない要素を内在させている。そこには矛盾的統合性の内実が細やかに明らかにされねば、ないし解きほぐされねばならないという解明を待つ課題内在的領域が残されたままである。われわれは、この残存課題を解明することによって、シェラーの人格主体論が彼の本来の意図に適合し、人間個々の一 (いち) としての個的人格存立が、社会的人格へ、さらに秘奥的人格へと混在的にも飛翔しながらプロセスをたどり世界内に包摂されておりまた意識の深度に応じてより深く包摂されていくことを知ることができる。その議論によって、

科学的実証と形而上の世界を貫いていく様態が明示される。われわれはそうした方向性に添う結論に至る解明を各様の形をとってこれまでの著作のなかで試みてきた。ホワイトヘッドの思索はこのこれまでの議論を補足するとともに強化してくれる側面を持つのである。

さてわれわれの把握する人格主体とは、ホワイトヘッドのいう主体とは異なる存立体なのであるか。ホワイトヘッドの捉える主体とは意識を含むものの、しかし、意識はあくまでも主体的形式の特殊な要素として位置づけられる。したがって主体のなかに自我上の世界すなわち意識領域が部分的に包み込まれていると理解されているのである。その個から広がりを持って飛翔していく全体的主体のなかにおける意識領域（それは段階的、部分的に把握可能である）のみをまさに自我論上の主体として把握することができる。ホワイトヘッドは、人間の核において上述のように現実的実在を位置づけるのであるが、この現実的実在は一（いち）としての役割を果たし終えると、他の現実的実在によって客体化される。これは主体の自我上の側面が一としての果たした役割（単体的成就）として客体化されるが、しかしそこには他の人格主体による統合化を前提にした継続があるとみることができる。このようにみていくと、現実的実在が受け継がれてゆく連続性のなかで、客体としての経験という継続内容が、われわれが絶えざる人格主体と呼ぶ存在の核の連続的存立に支えられて、個から世界に至る、さらに全体世界の作用実勢が形作られていくことになる。ホワイトヘッドの連続性理論は、現実的実在のなかにわれわれが自我上の主体とした意識上の主体と、対象化できないとした人格主体の両方を内在させながら、「一」たる存在、ないし「一」に向かう存在の高揚態のなかで、客体化という脱皮を経過しながら、対象化できない主体領域の統合作用としての存立を絶えず前提にすることによって現実的実在が位置づけられ、より高みに向かう人格主体への道を築くプロセスが経験の連続という形で在り、さらに次の段階へとステップアップがなされていく道が形作られていくことを明らかにしてくれる。

このように概説することのできる人格理論の内なる様態を以下さまざまな角度から解明していくことにしたい。またそのなかでホワイトヘッドにおいて十分に論じられていない側面を見出し、それを補う内容解明を現象学的側面から進めていきたいと思う。

#### 第四章 メルロ＝ポンティの現象学とプロセス哲学

ホワイトヘッドとメルロ＝ポンティという二者の議論の類似性と相違に言及することにより論理的深化を図るべく、知覚の内実解明に問題意識を傾注する。ここに取り上げるのは、人間の在り方を身体として捉えるという視点にもとづく議論である。こうした視点に立つためには、メルロ＝ポンティが現象学の展開のなかで提唱した「現象学的知覚論」に立つことがその要諦となる。そうした視座は、すでにホワイトヘッドが提唱していた先取的な論と連続する。この点については山本誠作が、その著において、かなり明晰にホワイトヘッドのいう身体的存在と現実的実在が存立する世

界にあたる「生活世界」との不可分性を取り上げて論じている。すなわち、身体的存在は生活世界によって限定され、その「生活世界」の限定性故に「それは実体つまりもろもろの性質の変化がそれにもとづいて生じる、それ自身自己同一的な基体としては捉えられない」。現実的実在も身体的自己と同様に、「それが置かれた世界との関わりにおける被限定即能限定的な過程」とみなされる。さらにホワイトヘッドにおいては、世界に直面する身体を、一（いち）としての存立体から客体化され他の存立体へと「移行において成立する総合体」とであると捉える<sup>(17)</sup>。ホワイトヘッドは、「置かれた環境世界によって刺激を受けて、それを感じることを、積極的『抱握』(prehensions)とし、これを「感じ(feeling)」と換言して用いている。この抱握との関連で「移行する総合体」として身体とそれが置かれる世界を捉えている。このことは、境界の線引きが困難であることを意味する<sup>(18)</sup>。ホワイトヘッド自身の言葉で統括的にいうと「抱握は、それ自身において、ある現実的実在の一般的性格を再現」する実質態様として把握されている。「それは『ベクトルの性格』を持ち」「情動、目的、価値づけ、そして因果作用を」含む。そうした抱握は、もしそこに「主体的形式」が想定されるとするならば、それに対して「なぜそれがそれであるところのものであるかの理由を与えることを要求する」。すなわち「主体的形式は、完結した主体の満足を獲得するようにさらに一層の統合を目指す主体的指向によって限定される」ことになる。したがって、その「未完成の部分ゆえに」、抱握は、現実的実在の「従属変数」にすぎない、ということになる。未完故の目的性の独自の存立が主体を必然化することによって導出される。こうして現実的実在の一般的性格の内実があきらかになる<sup>(19)</sup>。ホワイトヘッドは、さらにこの抱握を物的抱握と概念的抱握に区分する<sup>(20)</sup>。この区分に関連し山本による現象学を踏まえた抱握理解をさらに解題的に用いておく。それによりメルロ＝ポンティの知覚論との接点を形づくるいくつかの事柄が明らかになる。前者、物的抱握は、客体化された現実的実在とされ、それは物的である。後者、概念的抱握は、この物的な存在からそこに示された概念的な存立を導き出す作用をいう。「経験主体が概念的なものを物的なものから導き出すにあたって、それをいかに感じるかの仕方が概念的抱握の主体的形式である」。(例 赤さが各様の色調を持って具体的に感じられる)すなわち「赤さが主観的妥当性に還元されるのではなく、主体的形式によって抱握」される。それは「赤いものが身体器官を刺激して、そこにそれが赤い色調を持ったものとして知覚される」ことに他ならない<sup>(21)</sup>。こうした主体に先立つ(赤い)客体たる現実的実在を主体が内に受容することは物的抱握と呼ばれ、ここには「非感覺的知覚」がある。ホワイトヘッドはこれを後景に配された漠然とした様態として捉えている。これが先行し、それが次第に客観的に投射され、「いろいろな感覺対象が幾何学的諸関係によって結ばれて、眼前にはっきりと空間的広がりの中で展開されて知覚され」、これを「感覺—知覚」とする<sup>(22)</sup>。かくして漠然として関連づけさえ覚束なかったものが、「現示的直接性において、判明でき、よく輪郭づけられ、重要な関連を持つものとなる」。知覚の作用関連をより明確にしていくために、ホワイトヘッドは、現実的実在の自己超越的性格に言及しつつ次のようにいう。これに関する山本による簡明な説述を



引いておく。経験主体さらに知覚する主体は、「変化しない自己同一的基体ではない。」「自らを作っていく合成過程である」。さらに「自己超越体」として「後続する現実的實在に与件として客体化され」連続していくという延長線上の合成可能性のもとにおかれる主体である。その主体は、一方では「過去的世界によって与えられたといわれる局面」を持つ。ここには物的抱握が存立し、ここにあるのは「因果的知覚である」。この物的存立から概念的なものが導き出される。これが観念（上述の概念）的抱握とも呼ばれているものであるが、これには「観念（概念）的価値づけの範疇」とさらにその先に「観念（概念）的転換の範疇」があるとされる<sup>(23)</sup>。この範疇が客観世界に投射され、知覚の成立へと続くことになる。総体としての知覚の原初的態様も「素粒子の絶えざる交替する変化」であるが、次第に知覚様態が鮮明さを増し現示的知覚化してくる。こうした知覚は、共通に「現在化された場所」において、また両者共通に「永遠的客体」を存在させている。これは物的な永遠的客体から、その提示のもとに概念的な永遠的客体が生み出され、現示的知覚へと延長線上に続いていくことになる。この永遠的客体が、因果的知覚と現示的知覚を結合する媒体になる。このような作用は、まさに身体の存立を前提にして可能になるのである<sup>(24)</sup>。身体的自己が、「現実的實在の結合体」として存立するとき作用体の成り立ち、知覚判断が可能となる。そうした知覚判断は身体的自己における象徴的関連づけの知覚態様を通じて結合されて成立する、と理解される。そこにおいて判断をするのが抱握の主体である、ということになる。この判断が客観的知識として命題になるのである。そこに成立する「命題」というのは「現実態に関する観念」であり、「事物についての視差である」と理解されるのである<sup>(25)</sup>。

ここで、さらにメルロ＝ポンティの知覚論に触れながらプロセス哲学との関連について追及してゆくことにしよう。

メルロ＝ポンティの知覚論は、彼のその後の思索展開によって克服され変化を遂げたとされる向きもあるが、われわれは後に述べる論拠によってその議論には全面的には賛同できない。

まず彼の著書「知覚の現象学」における議論を参照していくことにする<sup>(26)</sup>。メルロ＝ポンティは知覚そのものを「多角的」とする相対的視座を前提にしている。彼はその知覚による把握を、「主観の構成の意味付与」であるとしている。しかし、これは存在の根源性の「事後の顕在化である」といわねばならない。それでもこの根源とはいまだ「感性的基底」であり、メルロ＝ポンティにおいてはこの基底のさらなる根源として「第一次的な秩序としての生（なま）の世界」が前提とされる。彼は知覚世界の『始源論』を探っていくのである。まさに「知覚世界とそれを捉える知覚を掘り下げて、その『始源』に到達」できる「新しいタイプの可知性」へ至ろうとしている。そこには垂直的な構造がある。これは「現在と過去のメタ志向性的な同時性」とも表現されうる。そこには「顕在性と潜在性との互いに包含し合う集約的な、開放的な同時性が存在している」。ここに描かれる根源においては「人間の差異化に基づく個から発した自己存在との両義性や存立基盤との両義性のなかで、その個の志向性が描かれ始める」。こうした様態との内的運動性のもとに、彼のいうと

ころの「生の存在」「野生の存在」「肉の存在」が、始源的（赤いリングにおけるメルロ＝ポンティのいう始原の赤を想起せよ）にあるものと理解される。

以上のようなメルロ＝ポンティの記述をその哲学的表現のオブラートをはがして捉えるならば、ホワイトヘッドの前述の議論をさらに世界開放的に深めてゆくのを助けてくれることに気づくのである。ホワイトヘッドのいう「因果的知覚」ないし「物的抱握」は、メルロ＝ポンティのいう存在の第二次的基底たる感性的領域に位置する、と理解できよう。またそれも物的領域から感覚―知覚とされる領域までの多角性を持つとみなされている。それとの連続性のもとに、メタ志向的同時的な概念的知覚の世界があるとされている。そのプロセスにおいて、総体としての知覚の原初的態様も「素粒子の絶えざる交替する変化」であるが、次第に知覚様態が鮮明さを増し現示的知覚化してくる。こうした知覚は、共通に「現在化された場所」において、また両者共通に「永遠的客体」を存在させている。これは物的な永遠的客体から、その提示のもとに概念的な永遠的客体が生み出され、これは現示的知覚へと延長線上に続いていくことになる。この永遠的客体が、因果的知覚と現示的知覚を結合する媒体となる。この線上に「主観の意味付与的な構成」が姿を現す。この構成の創生的連続が経験に裏づけられながら意識の動態における一（いち）たる現実的実在に向かうことになる。この動態としてのプロセス内において、世界の動態は、おぼろげなる物的抱握の領域を作用軸としながら「生の存在」「肉の存在」という始源性を軸心のエネルギーとして、内なる源泉領域の多角的連関をなす様態層を形作っていく。これは総体としてみるとシェーラーのいう「自他未分化の体験流」に匹敵する。これはまた多くの一となって客体化される存在の流れでもある。またメタ志向的でしかも同時的存立体という総括的把握が可能な始源性の動態の層をなして続く存在でもある。この動態状況のなかでさらにその延長上に絶えず、「主観の意味付与」という形の志向状況が生み出され、「概念的価値づけ」をなす現示的抱握がその知覚作用として働いていくのである。このような作用動態は、両義性、ないし両極性のもとで揺らぎという環境世界からの刺激を受け、動的連続性を失うことなく延長をたどり続ける。この生（なま）の存在等の表現であらわされる存在の本質回帰による把握は、「過去をも、未来をも、垂直に捉えうる同時性を有しており、そうした時間性ととともに、空間性をも、実在性においても、事物性においても潜在的に内在化された実存が、世界開放性のもとにある営み」として明らかにされる<sup>(27)</sup>。この動態とは、自他未分化の体験流の総体から一たる現実的実在が個の差異化とも換言できる状況のもとに生じ、そのさらなる総体が一の現在化と客体化を揺れのなかで表出しながら連続体をさらなる連続へと導いてゆく。そこには現示的知覚が意識の明度を上げつつ存立をする移行の連続があり、それは志向の連続として前方へとつながる道を作り上げていくプロセスとなる。

ここで、メルロ＝ポンティの論拠に沿うと、意識において「赤い」と感じられるときにそれ以前において生（なま）ないし野生の「赤さ」が存在するという始原の赤を強調する論点もあり得よう。しかし、それによって、始源性の存立とともに、意識のなかにおいて捉えられ赤さを経験する主体

との二者の関係性を問うときに、より全体的総合的な視座が得られる、ということを否定することは困難である。上述の議論は、そのことをより明確にすることができるのみである、そこには意識と始源性の相補性がある。「現象の本質を意識に捉えようとする志向性との間の相互性のなかで」真の本質把握がなされるのであり、始源性にとどまることなく、その本質「説明を完成するのは意識の働きを待つしかない」のである。それによって、「差異化されたその人の意識による」本質への道が存立を可とすることになる。ここにある相互性を図式的に捉えるならば、「垂直的な開放的存在が意識との相互性を持つ図として」ないし「相互性の場」として把握することが可能である<sup>(28)</sup>。意識と経験の介在を経て、知覚は物質的知覚から概念的かつ現示的知覚へと展開を遂げてゆくが、それは上記の場において創出されていく一（いち）への（さらに一からの）道に続くとして位置づけることができる。そこには志向性が、始源を捉える志向性から持続へ向かう方途を内包し現示化していく志向性へとその内なる価値志向によって継続発揮されていくプロセスがある。「主観的意味付与」「概念的価値」づけが、そこにおける存立の基底にある。生の、肉の、野生の存在とは、プロセス哲学に照らすときに、こうした志向のエネルギーをも含めて始源的と理解され、その総体としての本質へと近接する役割を担うといえよう。メルロ＝ポンティのいう始源性は志向のエネルギーを内包しておりそれはプロセスのなかにおいて発揮され続けることによってプロセスの持続が保持され、一たる存立へと至り、その客体化によるプロセスの継続的契機を形作ることになる。

## 第五章 二元化を超えて延長論のなかで矛盾的同一性を探る

「有機体の哲学は、なんであれ二元論の否定であり、それに対して、両極性の立場を強調する」。『二元論は諸事物を死んだバラバラなもの、つまりそれ自身存在するために他の何者も必要としないで、空間のなかで単純に位置を占める実体として捉えようとする』<sup>(29)</sup>。この二元的に見える実在をホワイトヘッドはバラバラなものとしてではなく「創造的衝動の二重の面」として捉える。これらは「現実的実在（実質）の物的極ならびに心的極と呼ばれる。いずれかの極を欠く現実的実在（実質）は、存在しないのである」。すなわち「現実的実在は物的極と心的極を伴って、本質的に両極的である」<sup>(30)</sup>。その「両極性の特徴」として、動的である「現実的な実在（実質）は、それに先立つものによって限定されながら、自らを限定するという仕方、自己を実現し……自己実現が終了すると、今度は後継者へと移行していく」<sup>(31)</sup>と把握される。

この二元論の否定に関しては、ホワイトヘッドによる「科学的唯物論」の否定において顕著にその特性を知ることができる。科学的唯物論の立場に立つと、それは「誤解に端を発する形而上学」に基礎づけられることになる。そこに在るのは、「任意の期間にわたって、その自己同一性と本質的属性とを保持する物質であり、そうした属性を持つ物質の存在性を基礎として唯物論が実体とされてきた」。世界は「物体の原初的属性」とかつて見做されたことがあったが、それは「現実的諸

契機内部の内的関係の形式」にすぎないとホワイトヘッドは捉える。そうして「こうした思考の変化」によって、「物理学の基底の観念としての、唯物論から有機体論への遷移」がなされた、とするのである。さらにそれは「唯物論から」「有機体的実在論」への変化であるとし、その変化の本質とは、「静的素材の概念を流動的エネルギーの観念で置き換える」ことにあるという。ホワイトヘッドのプロセス思想は、こうした唯物論的実体の存在を否定する。これを「機械論的」「唯物論的」と表現して否定するのである。彼は、前述のように量子力学に依拠し、「機械論的唯物論」を超えた体系を築こうとする。すなわち、量子力学によると、物質は全てエネルギーの流れに還元されて理解されうが、これを基本として宇宙にまで広がる世界の体系的考察へ至るのである<sup>(32)</sup>。

ホワイトヘッドのいう現実的実在とは、物理学における量子ないしその作用に相当すると理解してきた。量子が世界内存在と捉えられるときにそこに因果関係を持つ限定性がある場合においてそれは物的 (physical) とされる。それに対して、そこにある量子エネルギーが世界において「目的的に自己限定」される限り、それは精神的 (mental) とされる。この量子論的理解を介在させて捉えられた physical と mental の関係性はホワイトヘッドのいう両極性をきわめてよく表現している。彼の両極性理解は、量子に相当する現実的実在として精神的と物質的の両者を両極的に内在させている。さらに彼は、次のようにも表現している。「一つの面には、単純な因果的感じの成立が在り、他の面には、概念的感じの成立が在る」。これら二面は「現実的実在の物的極ならびに心的極」とされる。いずれかの極を欠く現実的実在は存在しない」。したがって「現実的実在は両極的」である<sup>(33)</sup> ということができる。そうしてその作用態としての世界内存在たる人間存在に光を当てるとするならば、先立って存在している存立体は、その「生成」によって構成される。その実在は、「生成過程の諸抱握の合成である」。この生成過程は、現実過程の決定性に制約され、同時に「永遠的客体の未決定性を概念的に抱握する」。そこにはまさに「両極性」が在る。所与性によって自らを制約しながら有意味性を保持する「潜勢態」たる永遠的客体の流入を経て、新しい決定性へと移行していくことができる。このプロセスを現実的に即してみると、前述したように、「自己を実現し…自己実現が終了すると、今度は後継者へと移行していく」という存在における作用継続として把握することができるのである<sup>(34)</sup>。

続いてわれわれは、この過去からの自己限定とともに、新しさの極と見える位置からの共在的自己限定について語らねばならない。

こうした自己限定によって意味形成がなされ、現実的実在が一 (いち) としての意味形成作用に参与していくことになるのである。

この「一」について、ホワイトヘッドは「複合的な特殊観念」であり「基数ではない」として、これが「多」という存在を前提にし、またそれは「複合的統一性に入っていくことが、事物の本性のうちにある」との認識のもとに「創造性」という新しさの原理と「共在性」という「類的名辞」を用いて究極的なものの範疇を描き出そうとする<sup>(35)</sup>。



一としての現実的実在は、それが「生成」されることによって「構成」されるという「過程」を有する。その過程において「共存性」という関係性のもとに新しい「創造性」が生じることが本性とされる。その「生成過程において生起してきた諸抱握の合成」が「区分」されて位置づけられる。まず、抱握の主体、そこにある抱握の与件、そして主体による与件の抱握の仕方（「主体的形式」）がある。さらに前述の「物的抱握」や「概念的抱握」の区分、また「積極的抱握」や「消極的抱握」の区分が想定される。さらにこうした区分が可能な多として存在する現実的実在が相互的に客体化し合うことで構成される関係性の統一によって結合体が形成されていく<sup>(36)</sup>。

しかし、ホワイトヘッドによると、そこに生じる特質の全ては「延長性というより一層根源的な事実につけ加わるもので」あり、その付加的「延長性でさえ、これら付加観念のいずれの導入にも先立って、あれこれの仕方であらゆる恣意的に、さまざまな度合いの特殊化を許容する」とされる<sup>(37)</sup>。すなわち、「延長的な時空的連続体は、現実世界によって抽象的潜勢態に課せられた制約の、基本的な様相」とされる。それは「物理的場」であり「新しい創造は、純粋な潜勢態からと同様に、現実世界から生起する」、さらに総括的には「それは宇宙全体から生起」する。こうして現実的実在の延長性という作用性向が説かれていく<sup>(38)</sup>。

ホワイトヘッドは、「過程と実在」の第4部全体を用いて延長について詳述している。彼は、「物的ならびに心的な盲目的抱握」が物理的宇宙を構成する構成体であり、それらは「各現実態のうちで、それらの連合した発生ならびに究極的合成を差配する指向の主体的統一性によって結び合わされる」。そうした結合は「主体の限界の彼方で」なされるのであるが、「それは一つの主体における抱握が後続する主体での抱握にとって客体的与件となるような仕方によって」なされる。このような相互結合が「延長の関係性へと結び合わされる」。この「延長」によって抱握における結合が内的関係であるとともに外的関係でもあるという「二重の面」が明らかとなるのである。すなわち現実態としての物理的世界の内的連帯性という関係性と個々バラバラな区分されたものの結合体という側面が延長体と捉えられることによって「二重の目的への」同時的「奉仕」が存立することになる。この同時的態様はホワイトヘッドによって「唯物論から『有機体的実在論』への変化」、すなわち「静的素材の観念を流動的エネルギーの観念で置き換える」こととして捉えられる。かくして、「全ての事物はベクトルである」ということになる<sup>(39)</sup>。すなわち全ては有機体としての存在性を方向性（志向性）を内在させた延長のなかに存立させていくのである。

## 第六章 有機的連続性と人格上の考察——支援と寄り添いの方途的意味

「プロセス哲学」は、有機的連続性としての宇宙的世界の流動的な動態についての説述という役割を担う論である。これは量子論をはじめとした現代物理学という科学的領域における成果を用いて人間の存在性と世界についての本質解明をしていこうとする思想といえる。そうした思想展開に



よって、科学と哲学が連動してゆき、またその密接不可分性が明らかとなり、われわれの視点からする人間の人格上の存在性についてもその存在の作用的本質を解き明かす役割を果たしてくれる。

われわれは人格上の人間存在を理解するにあたってシェラー（Sheler, Max）に添いながら自我上的人格性と人格主体という存在区分を設けて理解を進めてきた。しかしホワイトヘッドのいう現実的実在として人間を把握するとき、この二者の区分は便宜上の妥当性を持つのみであり、真理に至る原理上の存立様態としては、二元的とみなされるような説明はその論理的成立を不可とすることに気づかされる。また、量子的物的実在としてのみ現実的実在を捉えることの非妥当性についても大きな示唆を受けるのである。すなわち、その把握方途によると、物化的対象化の可能な世界にとらわれ、われわれの視座を自我上的人格とその位置する世界に限るということになり、人間の継続的存立を支える統合作用としての人格主体を把握することなく、それ故にプロセスにおける「唯物的」かつまた「機械論的」把握に終わる危険性を持つことになることを教えられる。

ここでわれわれはホワイトヘッドのいう「両極性」を再度想起せねばならない。自我上的人格とそれとの両極性の他の極として存立している人格主体という位置づけのもとに思考を続けることの意味がここに与えられる。両者は存立条件においては両極的存立関係にあるが、現実的実在として有機的に関連し共存立しており、その存在上の両極的關係性そのものが延長的プロセスを形作る。

さらにここで、いわゆる「プロセス」を再考することにしよう。ここでは一としての現実的実在がその役割を終えると客体化され他者たる現実的実在に内包されていく。その多くの存立体における複雑多岐な延長的連続性が世界内での無数の作用連関とさらなる連続と継続を形作っていく。ここには極微における量子的展開が想定されている。相互に一（いち）としての存在へと向かい関わり合って、単に横につながるのみでなく、前方における目で捉えきれない主体的統合性たる個々の人格性に向かい<sup>(40)</sup> その統合性を持つ作用連関に身を置くことがこの有機的連続の継続を可とするためには求められる。そこに一としての存立への道があり、それを相互に果たしていくための相互的存在参与がその有機性の存在性の受容という有機的生の部分から求められることになる。この作用を可とするのは両極性の片方である人格主体に向かい志向性を発揮していく意識の働きによる。そうしてそこにいう意識の介在による自己から他者、また総体としての社会への存在参与には寄り添いやそれに基づく支援が意味を持っていく。その寄り添いにおいては、他者との真実の出会いがある。意識の根底において目に捉えきれない人格への志向性の持続があればこそ、そのような出会いを通じての支援が形作られていくことになるのである。そこには真の共感共同への道が用意されていかなければならない。それは単に個的存立を可とするのみでなく、その個における人間たる一としての意味を内在させていく延長的存立への道でなければならない。そうした延長的存立のなかで個が意味を持つ一であることを開花させるためには、個の持つ潜在能力の開発的支援や、それを現実社会において可能性として生かす条件設定が個の本質への回帰ないし帰還という意味のリカバーという方向性をもって、ストレングスやエンパワーとしての力動性をもって、さらにバリアフリー

やユニバーサルなデザインとしての広義の環境条件にまで至る福祉の開発が求められる。それは、さらに物理的領域の深化的ミクロ化としての感覚上の世界に至るバリアフリー（例 スヌーズレン<sup>(41)</sup>的手法等）による心を全てに開く可能性への「開きの方途」として前進がたどられねばならない。そうした諸方途はあくまで特殊的でしかない意識の産物であり、自我世界の限界性を保持している。それが可能性となりうるのは、人格主体との開きの関係を持つ場合であるといえよう。そこに連鎖が形作られることを必須とする。この方策上の連鎖は、存在の根底における存立要件としてわれわれに課せられた本質的営みの重要な部分である。その具体をみると、障がい状況等による生活のしづらさへの配慮を例にとると、その対応が一個人の個性への配慮として普通（ノーマル）であるという認識が広がりを見せる現今、障がいを理由とする差別撤廃へ向けての（「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律、平成二十五年法律第六十五号」2016年度4月施行などを想起せよ）、まさに微視的な対応力が必然性へと歩みはじめた現況を事例として挙げるができる。人類が抱いた志向性が、その部分的存立（ないし実質化）を可とする段階を経て、こうして人全てが各自可能なスタートラインに立って個的な生の意味を個性発揚によって形作っていく（いち）たる存立への道を歩む可能性が与えられる。われわれは、そのような人格の主体性発揚の段階へとたどり着きつつあるのである。それは、総合的に人類的規模の未だ実現されざる潜在的可能性を開花させていく道を用意するプロセスの開放に他ならない。そこには極微に至る存在性の「相互的有様」を開発していくことが不可欠であり、それによる、志向が実を結ぶことのできる関係性、すなわち開発的寄り添いの実質化が不可欠とされる。それが人間存在における営みの第一歩であるということのをわれわれは深く認識せねばならない。その認識のもとで、人間全ての存在価値の開花へ向けて出発することが、福祉価値の方向性のなかで求められる。志向性という目的的統合性の要に何を位置づけるかは人間存在の選択にゆだねられている。しかしその選択における平等価値や、全ての人間存在に人類が認めていこうと努力してきた人権価値という方向性は、人間存在における存在価値を広く深く見出そうとする方向性を選択し、人間世界運営の舵をその方向に切っていこうとしてきた努力の成果なのである。少なくとも先進国といわれる諸国家のこの舵取りを所与として考えるときに、われわれはより深く人類の可能性を前に押し開く方途を手にすることになる。しかし意識世界の限界性とそれ故の自我上の存立体の部分性を想起するとき、人格主体との連鎖的存立による方途上の高揚が絶えず求められる。全ての存在価値の開花へ向かう希求性の実現・実践という方途も、いまだ永遠なる彼方にあるとしか見えない。それでもその道程は人類に無限ともいえる人間の可能性を開花させていくという根底的な歩みの内実を約束する。

#### 注

- (1) 牛津信忠著「社会福祉における相互的人格主義」I II、久美出版、2008年。
- (2) 牛津信忠著「社会福祉における場の究明—共感的共同からトポスへ至る現象学的考察」、丸善ブラネット、2012年。

- (3) 上掲書「相互主義的人格主義」63頁。上掲「場の究明」iii。
- (4) 特に上掲「場の究明」における第8章及び9章を参照されたい。
- (5) 「全人の人格の統合的人格の確立」という福祉理念については、嶋田敬一郎「社会福祉体系論」, ミネルヴァ書房, 1980年参照。
- (6) Whitehead, A. N., “Process and Reality, 1927-28”. 山本誠作訳「過程と実在(上)」, 1984年, 松籟社, 序文i.
- (7) Kraus, Elizabeth M., “The Metaphysics of Experience; Acompanion to Whitehead’s process and reality”, Fordham University Press, 1979.
- (8) *ibid.*, pp1-2
- (9) *ibid.* p. 71
- (10) 山本誠著作「ホワイトヘッドと西田哲学」行路社, 1984年, 参照。
- (11) 本稿では, “Actual Entity”を「現実的実在」と訳している。実在ということと客観化できる存在と捉えられるであろうが, 本稿では, Entityという字義にある物的に在るものと観念との統合態を意味する側面を重視して, あるいは物的と心的の両極的存立態という意味を込めて, 実在としている。
- (12) 「非感覚的知覚」とは, 感覚器官の作用動態としての「生理的プロセス」として理解される。また「感覚一知覚」とは感覚対象が明白に知覚されてくることを意味する。上掲書, 「ホワイトヘッドと西田哲学」, 77頁および12-15頁。
- (13) *op. cit.* “The Metaphysics of Experience”. p. 71
- (14) 前掲, 山本誠作訳, 「過程と実在(上)」, 29-30頁。
- (15) 同訳書89頁。
- (16) 同書87-88頁。
- (17) 上掲書, 「ホワイトヘッドと西田哲学」, 72-73頁。メルロ＝ポンティにおける「意識の志向性」とホワイトヘッドにおける「抱握」との類似性は, われわれに両者の「ベクトル的人格」に目を開かせてくれる。同書104-105頁。
- (18) 同書73頁。ここにいう「積極的抱握」とは, 現実的実在が主体によって感じられることを, つまり客体化されることをいう。これに対して消極的抱握があり, これは情緒的複合へ付加され, 最終的な「満足」の主体的形式となる。前掲, ホワイトヘッド著, 山本誠作訳「過程と実在(上)」, 68-70頁。
- (19) 上掲書「過程と実在(上)」31頁。
- (20) 同書, 39頁。
- (21) 前掲書, 「ホワイトヘッドと西田哲学」, 73-74頁。
- (22) 同書, 76-77頁。
- (23) 同書, 78-79頁。
- (24) 同書, 82-84頁。
- (25) 同書, 87頁。
- (26) メルロ＝ポンティの知覚論については, 自著「社会福祉における場の究明」をもとに以下本文に説述している。前掲書, 「社会福祉における場の究明」, 53頁。
- (27) 同書, 54-55頁。
- (28) 同書, 25頁。
- (29) 山本誠著作「ホワイトヘッド過程と実在」, 晃洋書房, 2011年, 54頁。
- (30) 前掲訳書「過程と実在(下)」436頁。
- (31) 上掲書「ホワイトヘッド過程と実在」54頁。この「プロセス」は, 第3章の末尾に述べた一(いち)たる存在の高揚体への延長的道筋そのものとして理解できる。
- (32) 上掲訳書「過程と実在(上)」134-135頁, 「過程と実在(下)」554-555頁。
- (33) 同書, 「過程と実在(下)」436頁。

- 34) 上掲書「過程と実在（上）」, 76 頁。
- 35) 同書「過程と実在（上）」, 34-35 頁。
- 36) 同書, 38-39 頁。
- 37) 同書, 157 頁。
- 38) 同書 137 頁。
- 39) 上掲書, 「過程と実在（下）」, 553-555 頁
- 40) シェーラーの人格論が活かされる道がここにある。
- 41) 河本佳子著「スウェーデンのスヌーズレン」新評論, 2003 年等。

# The Meaning and Possibility of “Process Philosophy” in Human Welfare Theory, Part I: The Study of Core Logic in Methodological Meaning and Possibility for Development in Welfare Theory

Nobutada USHIZU

## Abstract

---

This study consists of three parts (Parts I to Part III), as shown in the table of contents.

Welfare theory is considered from the standpoint of transforming personal identity theory into core logic. From such a standpoint, the operation of the personality is discovered to be, first of all, an integrative operation. Furthermore, the field of the ego and modes based on personal identity can be explored. In order to discuss the logical development from essential theory to technical aspects of the theory, the process from abstract, essential theory to concrete, illustrative science must be closely observed. Such observation includes theoretical processes concerning changes in welfare conditions that need to be set up to insure a sense of well-being. Previously these issues could not be fully clarified. This theory will consider the ideas of A. N. Whitehead, who turned his attention to quantum theory early on, determined to elucidate the processes of essential, organic existence. His philosophy, the “Philosophy of organism” or “Process philosophy,” illuminates the semantic existence of an individual human being on the basis of continuity of meditation extending from science to religion. Whitehead’s studies subsume the content of macroscopic and dynamic states which hold the maximum possible number of organic situations, while retaining a microscopic viewpoint. Moreover, the development of such an argument encompasses the synthetic content of a whole field of view. Thus, these ideas can be expected to contribute to academic effort to support personal identity from the viewpoint of human welfare.

---

**Key word:** organic philosophy, process philosophy, continuity, Quantum, bipolarity, actual entity